

ATL抗体陽性妊婦から出生した児の哺乳方法の選択に 関する保健指導

多田 裕**、宇賀直樹*、沢田 健*、清水光政*、梅田優子*、
若江恵利子*、三科 潤**

要約 ATL陽性の妊婦が出生した場合、母子感染を予防する手段として母乳を中止することが有効であるとされている。しかし、実際に母乳を中止するときには、母親は自らの母乳を与えられないことに、心理的に大きな葛藤を経験する。これらの点を含めて、母子感染を予防するため哺乳方法の選択に当たっての保健指導のあり方を検討した。

見出し語：栄養方法、授乳期間、ATL抗体価

研究方法 ATL抗体陽性の妊婦から出生した児の追跡を行なうとともに、経産婦の場合には既に1才を越した児の乳児期の栄養方法と感染の有無につき検討した。

また、出産直後の母親に面接し、ATLV感染や母子感染の予防法などにつき説明し、哺乳方法の選択を求めたが、説明すべき事項

や母親の反応の検討から、保健指導の指針作成上の問題点を検討した。

結果

1) 児のATLV感染率

ATL抗体陽性の母親から出生した児の内1才以上でATL抗体を測定し得た児は26

*東邦大学医学部新生児学研究室 (Dep. of Neonatology,
School of Medicine, University of Toho)

**東京都立築地産院小児科 (Div. of Pediatrics, Tokyo
Metropolitan Tsukiji Maternity Hospital)

名であった。

これらの児の栄養方法は、人工栄養は2例で、22例が母乳栄養であり（2例が栄養方法不明）、少なくとも出生後3カ月前後までは母乳栄養である児が大部分であった。しかし、1才以降に調べたATL抗体が陽性の児は1例（3.8%）のみであり、25例はATL抗体陰性であった。これらの児の母親のATL抗体の値は、PA法で1024倍以上が5例、512倍が4例（生後4カ月まで母乳を与えていた陽性例を含む）、256倍が2例、16倍が14例、8倍が1例で抗体価が低い例を多く含んでいた。

2) 保健指導上の問題点

感染を予防するために母乳を中止することを選択した母親が多かったが、初めから母乳を与えられないことの残念さを訴える母親も多かった。また、新生児室や産科病棟では母乳の重要性が強調され、他の母親は、助産婦や看護婦の助力の元に母乳哺育の確立に努力している傍らで、母乳を与えられない事は、心理的にも大きな影響があると考えられた。

哺乳方法の選択に当たっては、母乳を与えて感染した時におこる危険と、母乳を与えなかったことによる危険を質問されることが多かった。

考案 母乳と人工栄養の利点と欠点を列挙することは可能であるが、本来新生児や乳児の栄養は母乳で行なうべきであり、両者を比較することはできない。しかし、ATLVの母

子感染を予防するための有効な手段は、現在のところ母乳を中止する以外の方法は知られていないため、止むを得ず母乳を中止を選択する事も多い。

我々が1才以降にATLV抗体を検査した児では、ATLVのキャリアとなっている児は極めて少なかった。

この結果は、母親の抗体価が低く、確認試験では陽性とならなかった例も含んでいるためとも考えられるが、もしそのような傾向があるならば、母乳中止は限られた症例に限定できることになる。また、出生直後から1滴も母乳を飲ませられない場合と、母乳確立のための積極的な努力はしないが、生後しばらくの間、乳首を口に含ませることは出来るとした場合では、母親の心理状態に与える影響は大きく異なる。

栄養法の選択に当って正確な情報を与えるためには、児に感染をおこす危険率とともに母乳を中止したときに生じる危険率を知る必要がある。しかし、わが国でその計算を行なうためには基礎となる資料が乏しく、その必要性が痛感された。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 ATL 陽性の妊婦が出生した場合、母子感染を予防する手段として母乳を中止することが有効であるとされている。しかし、実際に母乳を中止するときには、母親は自らの母乳を与えられないことに、心理的に大きな葛藤を経験する。これらの点を含めて、母子感染を予防するため哺乳方法の選択に当たっての保健指導のあり方を検討した。